

炎の美

「NPO 法人 湖東焼を育てる会」活動展を開催しました

私たち NPO 法人湖東焼を育てる会では、この 1 年間、会員による作品の制作、絵付けや作陶の体験教室などを実施して、かつて彦根に華開いた湖東焼の普及と啓発に努めてきました。また、今年度は、新たに調査研究事業として湖東焼窯場跡で採集された資料の整理作業も行ってきました。

こうした活動の一端を紹介する活動展を、「糸びす講」で賑わう中央商店街のコジマギャラリーをお借りして開催しました。

【開催日時】 11 月 23 日（日）12:00～16:00 （来場者： 87 人）
11 月 24 日（祝）11:00～15:00 （来場者：135 人）

【開催場所】 中央商店街コジマギャラリー

【開催内容】 ◆作品展示：会員がこの 1 年間に制作した作品展
◆絵付け体験：来場者による絵付け体験（24 日のみ／体験者：28 人）
◆湖東焼窯場跡採集品展示・洗浄作業：湖東焼窯場跡で採集した陶磁器片・窯道具の展示とともに、洗浄作業を公開。



会員が制作した作品を見る来場者



絵付けの体験をする来場者



湖東焼窯場跡採集品の展示



湖東焼窯場跡採集品の洗浄作業を公開

湖東焼の窯場と職人

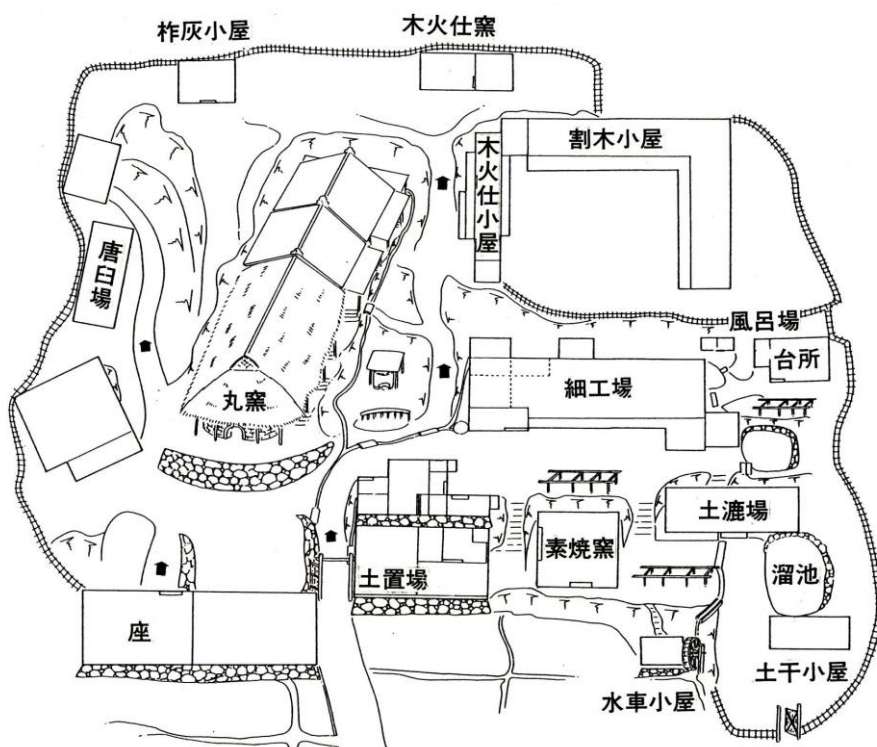
湖東焼は、創始者絹屋半兵衛により初年のみ芹川左岸の晒山に窯を築きましたが、その後は藩窯期をへて廃窯にいたるまで、長く佐和山麓の餅木谷にあって盛衰を共にしました。

窯場のあった佐和山は、かつて、天下分け目の関ヶ原合戦において西軍の総大将であった石田三成の居城でした。窯場の餅木谷から見上げる位置には本丸跡が聳え、窯場近くには三成の屋敷跡もありました。この佐和山からおよそ2 km西にあるのが彦根城。彦根の城下町からは、窯場の煙をよく望むことができました。

安政2年（1855）に描かれた「湖東焼窯場絵図」を見ると、中央に9間の丸窯（登窯の一種）があり、その東には多くの職人が詰めた細工場が広がっています。この頃、湖東焼の窯場には30人前後の職人がいて、「土づくり」「成形」「絵付け」などを分担していました。

安政2年は、藩主直弼のもとで窯場が大幅に改革され、規模の拡大が図られて黄金時代の幕開けとなった年でした。2年後の安政4年には、職人の数は一気に55人にまで膨らみます。職人の内訳は、陶工20人、絵師15人、荒仕7人、子ども稽古人13人でした。

陶工のほとんどは尾張の出身者で占められていました。絵師は加賀・京都・尾張そして彦根など各地の職人が抱えられたようです。荒仕は雑役を担う人たち。そして13人の子ども稽古人は、前年に定められた「子ども稽古人の制」によって採用された12歳以上の地元の子供たちでした。彼らを腕の良い職人に付かせて技術を学ばせ、将来の良工を養成しようとするものでした。彼らが育てば、高い賃金で抱えている遠来の職人の数を減らすことができるという意図があったのでしょう。ただ、直弼の暗殺とともに黄金時代が突然の幕切れを迎えるまでわずか数年。後継者の育成という長期計画も破綻せざるを得ませんでした。



安政2年に描かれた「湖東焼窯場絵図」のトレース図